

子どもの問題行動と母親の愛着との関連性、
並びに子どもの問題行動に対する
母親評価と保育士評価の相違性について

辻野 順子*・雄山 真弓**・田 靡 みつ子***

Relationship between child problem behaviors and
maternal attachment and differences between maternal and
child nurse's evaluations for child problem behaviors

Junko Tsujino, Mayumi Oyama and Mitsuko Tanabiki

要約：子どもの問題行動が生じる原因の探究は重要である。本研究は、5歳児をもつ母親と5歳児担当の保育士を対象にEyberg Child Behavior Inventory (ECBI: Eyberg, S. M., 1992) 日本語版とMaternal Attachment Inventory (MAI: Muller, M. E., 1994) 日本語版を使用し、子どもの問題行動と母親の子どもへの愛着との関連性を調査した。子どもの行動の評価は、同一子どもについて母親と保育士のそれぞれが質問紙に回答した。ECBIから4つの下位尺度を抽出し、MAI得点による愛着の高低群との関連性を検証した。結果は、ECBIの下位尺度である「欲求不満行動」の母親評価に有意差を認めた。愛着高得点群は愛着低得点群よりも「欲求不満行動」得点が有意に低かった。また、ECBIの項目別に母親評価と保育士評価の得点の有意差検定を行った。ECBIの28項目中20項目において、母親評価は保育士評価よりも得点が高く、両評価者間に有意差を認めた。有意差を認めた要因として、評価者の子どもを見る目の違いと子どもの行動が家庭と保育園では異なることが考えられる。

Abstract : It is essential to research the causes of children's problem behaviors. This study was designed to investigate the relationship between children's problem behaviors and maternal attachment to the children by using Eyberg Child Behavior Inventory (ECBI: Eyberg, S. M., 1992) and Maternal Attachment Inventory (MAI: Muller, M. E., 1994) with mothers of 5 years old children and children nurses in charge of 5 years old children. Both mothers and children nurses completed questionnaires regarding their evaluations for child behaviors. 4 subscales were extracted from ECBI. We verified relationship between those 4 subscales and mother's attachment. In consequence, a significant difference was showed in maternal evaluations of 'Frustration behavior' which is one of the subscales of ECBI. The children of mothers with high levels of attachment showed low 'Frustration behavior' score. Further, a significance test on scores of maternal and children nurses' evaluations by items

*関西女子短期大学 准教授

**関西学院大学 教授

***姫路ひまわり保育園 園長

was researched in this study. Maternal evaluations are higher than children nurses' evaluations in 20 out of 28 ECBI items showing significant differences between both evaluators. It is presumable that the differences of evaluators' view points and children's behaviors at home and in a nursery school are the factors of the significant differences.

Key words : 子どもの問題行動 problem behaviors 母親の愛着 maternal attachment 母親の行動評価 maternal evaluations for child behaviors 保育士の行動評価 child nurse's evaluations for child behaviors

I. 目 的

愛着理論の仮説¹⁾では、新生児の生得的行動(例えば、泣く、手足を伸ばす、笑うなど)は、親密にかかわる保護や養育の元で生じるのが望ましいとしている。この親密性は安全と満足、そして、その後の愛着関係の青写真や内的表象として子どもに備わる。母親はまた、子どもの愛着行動に応じて行動する。これらの相互行動が母親と子どもの間で長期間続き、愛着に関する入り組んだ関係を発達させ、他者と築く人間関係の基となる。母子関係は、子どもの発達におけるすべての基礎であり、良好な母子関係を築く上でも、母親の行動の仕方が重要である。

また、愛着理論は、特定の個人に対して親密な情緒的な絆を結ぶ傾向を人間の基本的な構成要素とみなしている。子どもは、生得的に個人との間で親密な絆を結ぶ原初的な状態や生物学的機能を持ち、それらを形成し、維持する能力を有している。子どものこのような能力は、社会的な協力方法を発達させるように予めプログラムされている。そして、それを実行させるかどうかは、かなりの程度、子どもがどのように扱われるかにかかわってくる。

Bowlby の愛着理論の発達に寄与した Ainsworth²⁾は、こころの安全基地として母親と子どもの相互関係の重要性を論じた。子どもへの安全基地の提供は、母親の役割であり、心の安全基地を基盤として子どもの愛着行動や探索行動が促進され、拡大される。子どもに安全基

地を与えられる母親は、子どもに親への信頼と共に、子ども自身の自己信頼を形成させることができる。

愛着理論が示すように、人と人との関係性の問題は、人生の早期体験から始まり、個人にさまざまに影響を及ぼしていく。母親と子どもの愛着相互関係においては、母親側の要因や子ども側の要因、そして、母と子を取り巻く環境的要因の影響を受けながら、母子関係を発達させ、深めていく。しかし、母子間の早期愛着形成に問題を残す場合がある。早期愛着形成が問題となる愛着障害は遺伝ではなく、胎児期から5歳までの、母親と、または出生後母親不在のとき母親のかわりを努めた人たちと子どもとのかわり合いの有無によって、未発達な脳が起こす感情面、行動面、思考面、人間関係、身体面、道徳面、そして、倫理観における障害である³⁾、といわれる。また、愛着障害をはじめ、不安定な愛着を受けた子どもはより攻撃的で衝動的であることが示唆されている^{4,5)}。

乳幼児期の子どもは、心身が未分化であると同時に多くの言葉を持たないため、精神的な苦痛を言葉として表現しにくい。従って、愛着は子どもの身体を通して表されることが多い。特に、子どもの問題行動は関係性の出発点での配慮すべき問題であるといえる。問題行動は、周りの人が認知できる子どもの行動だけに注目するのではなく、なぜその行動が生じているのかという原因を考える必要がある。多くの言葉をもたず、自分の気持ちを表現する方法を身につけていない幼少期の子どもは、問題行動により

自分の気持ちを表している場合も多い。子どもは身体を使って自分の気持ちを表現する。子どもの行動が成育年齢や場の状況にふさわしくないときは、子どもの心の内面に目を向ける必要がある。子どもの行動が、自分の気持ちにそぐわない心の内面をあらわしているとき、子どもの心の中には大なる葛藤が生じていると考えられる。

子どもの心の葛藤は、母親の相互作用行動と子どもの相互作用行動との関係性に問題がある場合が多いといわれている。そのため、子どもの問題行動の緩和は、母親の顕在的相互作用での行動を変えることが実践的であるといえる。従って、母親の自分自身への気づきと行動の変容が、母親と子どもの関係の質を高めるために必要となる⁹⁾。

以上の観点により、本研究のテーマは、子どもの問題行動に関係する要因として、母親の子どもへの愛着を取り上げ検証することである。そして、子どもの問題行動の評価は母親と母親以外の他者として、日常的に子どもと接している保育士が行った。立場が異なる二者が子どもの行動を評価することにより、子どもの問題行動と母親の愛着との関連性をより明確にすると考えられる。

実証する項目は以下の通りである。また、子どもの行動や母親の愛着に関連すると考えられる子どもの睡眠時間と朝食の有無についての調査結果を記載した。

1) 子どもの問題行動と母親の子どもへの愛着との関連性（母親評価の子どもの問題行動と保育士評価の子どもの問題行動の両側面から母親の愛着を検証する。）

2) 子どもの問題行動の項目にみる母親評価と保育士評価の相違性

尚、本研究は調査の内容上、記名式で回答を求めたが、個人情報保護法に基づき保護者の承諾を得て行った。

II. 方法

1. 研究対象児：保育園の5歳児クラス42名
[男児25名(59.5%)、女児17名(40.5%)]
2. 調査時期：2007年2月
3. 調査用具：①Eyberg Child Behavior Inventory (ECBI: Eyberg, S. M., 1992)⁷⁾日本語版⁸⁾
②Maternal Attachment Inventory (MAI: Muller, M. E., 1994)⁹⁾日本語版¹⁰⁾
4. 調査紙への回答者：研究対象児の母親 (ECBIとMAIに回答)と研究対象児担当の保育士2名 (ECBIに回答)である。
5. 調査紙への回答について
 - 1) ECBIは36項目で構成される。原文は7件法で回答するが、本研究は、決してない(1点)~いつも(5点)までの5件法で回答を求めた。母親は全項目に回答したが、保育士は保育園で見られる行動(28項目)のみを回答した。従って、母親評価による個人の総得点は36点~180点間にあり、保育士評価による個人の総得点は28点~140点間にある。保育士による評価は2名により行われたが、信頼性が高い評価者(Cronbachの α 係数が.906)の回答を用いた。
 - 2) MAIは26項目で構成される。めったにない(1点)~だいたいいつも(4点)の4件法で回答する。個人の愛着総得点は26点~104点間にある。

III. 結果と考察

1. 子どもの年齢

平均：6歳4ヵ月 (SD=0.3) 範囲：5歳10ヵ月~6歳10ヵ月

2. 子どもの身長と体重

1) 身長

平均：114.1 cm (SD=5.6) 範囲：104.2 cm～125 cm

2) 体重

平均：20.9 kg (SD=3.4) 範囲：15.6 kg～32.5 kg

3. 子どもの日常生活について

1) 起床時間

6:00～8:30 (最多時間帯 7時～7:30 7時までに起床 80.5%)

2) 就寝時間

19:30～23:00 (最多時間帯 9時～10時 10時までに就寝 87.8%)

3) 睡眠時間

平均：9時間 40分 (SD=0.67) 範囲：8時間 30分～11時間 30分

4) 朝食の摂取の有無

朝食を摂る 40名 (95%) 朝食を摂らない 2名 (5%)

4. ECBI の因子構造

子どもの行動を多面的にみるため、ECBI の母親評価による得点から主因子法による因子分析を行った。その結果、4 因子を抽出した。バリマックスで回転後、因子負荷量 |.35| 絶対値以上で ECBI 36 項目の全てが採択された。それぞれの分散の寄与率は、第 1 因子から、14.450%、12.583%、10.396%、そして、8.666% である。累積寄与率は 46.095% である。各因子の内的整合性を検討するため、Cronbach の α 係数による信頼性分析を行った。第 1 因子から順に .843、.812、.780、.767 であり十分な信頼性が確認された。

第 1 因子は 13 項目で構成される (項目 13, 17, 19, 30, 12, 27, 18, 35, 29, 28, 21, 26, 5)。因子項目は、「13. かんしゃく持ちである」、「17. 怒鳴ったり叫んだりする」、そして、「19. 物やおもちゃをこわす」といった欲求不満を表す項目で構成されていることから「欲求不満行動」と命名した。第 2 因子は 7 項目で構

成される (項目 34, 31, 32, 25, 33, 22, 36)。因子項目は、「34. 一つのことに集中することが難しい」、「31. 長い時間集中することができない」、そして、「32. 何事も最後までやり遂げることができない」といった集中力の欠如を表す項目で構成されていることから「集中力の欠如」と命名した。第 3 因子は 8 項目で構成される (項目 14, 11, 15, 24, 7, 10, 23, 9)。因子項目は、「14. 生意気である」、「11. 決められたことについて両親に文句を言う」、そして、「15. ぐちる」といった反抗的態度を表す項目で構成されていることから「反抗的行動」と命名した。第 4 因子は 8 項目で構成される (項目 6, 2, 16, 20, 1, 3, 8, 4)。因子項目は、「6. 寝る支度をなかなかしない」、そして、「2. 食事の時間にだらだらするか、だらけてしまう」といった怠惰を表す項目で構成されていることから「怠惰行動」と命名した (Table 1)。

5. ECBI 各因子と MAI の平均値 (SD)、中央値、範囲

Table 2 は、ECBI 各因子 (母親評価と保育士評価)、並びに、MAI との平均値 (SD)、中央値、そして、範囲を示している。

保育士評価の項目数は第 1 因子が 10 項目 (項目 13, 17, 19, 30, 12, 35, 29, 28, 26, 5)、第 2 因子が 5 項目 (34, 31, 32, 33, 22)、第 3 因子が 6 項目 (項目 14, 15, 24, 10, 23, 9)、そして、第 4 因子が 7 項目 (項目 2, 16, 20, 1, 3, 8, 4) である。

6. ECBI 各因子と母親の愛着得点の高低群との関連性

母親の子どもへの愛着得点を 2 群に区分した (愛着高得点群：愛着得点上位 3/4・愛着低得点群：愛着得点の下位 1/4)。各群の人数は、愛着高得点群が 32 名 (76.2%) であり、愛着低得点群が 10 名 (23.8%) である。

両愛着群により、母親評価による ECBI 各因子得点、並びに、保育士評価による ECBI 各因

Table 1 ECBI の因子構造

	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子
第 1 因子「欲求不満行動」				
13. かんしゃく持ちである	.701	.004	.113	.177
17. 怒鳴ったり叫んだりする	.660	.120	.091	.227
19. 物やおもちゃをこわす	.624	.101	.137	.045
30. すぐに取り乱す	.612	.403	.076	-.041
12. 自分の思い通りにならないと怒り出す	.577	.149	.067	.138
27. 兄弟げんかのときに暴力を振るう	.546	-.498	-.008	.103
18. 親をぶつ	.487	.140	-.086	.052
35. 活発すぎるか落ち着きがないかのどちらかである	.484	.207	.476	.292
29. 仕事の邪魔をする	.466	-.020	.378	.097
28. たえず注意をひこうとする	.460	.104	-.068	-.025
21. 盗みをはたらく	.434	-.062	.267	-.210
26. 同じ年頃の友だちと取っ組み合いのけんかをする	.424	-.248	.360	-.086
5. お手伝いを頼んでも言うことを聞かない	.401	.398	-.013	.323
	寄与率	14.450%		
	Cronbach の α 係数	.843		
第 2 因子「集中力の欠如」				
34. 一つのこと集中することが難しい	.318	.729	.273	.122
31. 長い時間集中することができない	.425	.720	.058	.081
32. 何事も最後までやり遂げることができない	.364	.718	-.073	.194
25. 兄弟と口げんかをする	.128	-.686	.124	.090
33. 自分一人で楽しむことが難しい	.184	.642	-.084	.178
22. うそをつく	.389	-.456	.255	.133
36. おねしょをする	.077	.368	.055	.133
	寄与率	12.583%		
	Cronbach の α 係数	.812		
第 3 因子「反抗的行動」				
14. 生意気である	.225	.024	.758	.011
11. 決められたことについて両親に文句を言う	.063	.299	.720	-.092
15. ぐちる	-.043	-.127	.685	.043
24. 同じ年頃の友だちと口げんかをする	-.121	-.469	.567	.070
7. 決められた時間に寝ようとしない	-.416	-.182	.502	.473
10. 何かするように言われると反抗的な態度をとる	.003	.376	.465	-.051
23. 他の子どもたちをからかったり怒らせたりする	.223	-.370	.454	.059
9. 罰を与えるとおどかすまで言うことを聞かない	.278	-.050	.351	.164
	寄与率	10.396%		
	Cronbach の α 係数	.780		
第 4 因子「怠惰行動」				
6. 寝る支度をなかなかしない	-.261	.131	.313	.681
2. 食事の時間にだらだらするか、だらけてしまう	-.013	.202	-.299	.669
16. すぐに泣く	.131	-.054	-.051	.369
20. 物やおもちゃを大切にしない	.335	.038	.126	.489
1. 着替えるのにぐずぐすと時間がかかる	-.167	.445	-.152	.476
3. 食事の時のお行儀があまりよくない	.267	.023	.134	.455
8. 約束を守らない	.386	-.056	.045	.442
4. 出された食事を食べない	.114	.282	.081	.400
	寄与率	8.666%		
	Cronbach の α 係数	.767		

Table 2 ECBI の各因子と MAI の平均値 (SD)
・中央値・範囲

	平均値(SD)	中央値	範囲
ECBI (母親評価)			
欲求不満行動	25.9(6.7)	25	16-41
集中力の欠如	18.4(5.4)	17.5	3-34
反抗的行動	17.3(4.1)	18	9-25
怠惰行動	21.9(4.4)	22	13-35
ECBI (保育士評価)			
欲求不満行動	16.0(4.0)	15	11-31
集中力の欠如	7.8(3.6)	8	4-18
反抗的行動	9.9(2.3)	10	6-16
怠惰行動	15.7(3.7)	15	12-32
MAI	90.6(9.1)	93	68-104

Table 3 愛着の高低群による ECBI の母親評価、
並びに保育士評価の t 検定

	愛着高 得点群	愛着低 得点群	t 値	p 値
ECBI (母親評価)				
欲求不満行動	24.7	29.6	2.082	*
集中力の欠如	18.6	18.9	0.152	n.s.
反抗的行動	16.9	18.6	1.123	n.s.
怠惰行動	21.9	22.1	0.140	n.s.
ECBI (保育士評価)				
欲求不満行動	16.1	15.8	0.178	n.s.
集中力の欠如	7.9	7.7	0.132	n.s.
反抗的行動	9.7	10.8	1.375	n.s.
怠惰行動	15.8	15.6	0.133	n.s.

*p<.05

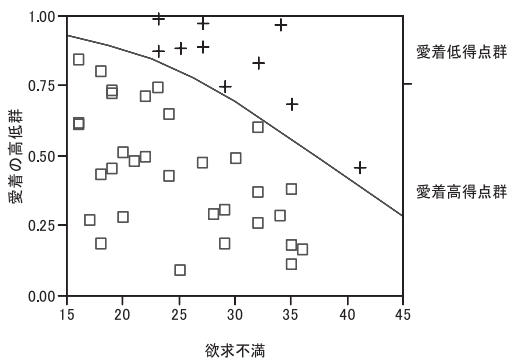


Fig. 1 愛着得点の高低群による「欲求不満」の有意差検定の図

子得点について有意差検定を行った。その結果、母親評価の ECBI 因子「欲求不満行動」に有意な群間差を認めた ($p < .05$, Table 3)。愛着高得点群の方が愛着低得点群よりも「欲求不満行動」得点が低かった (Fig. 1 参照)。また、保育士評価では、ECBI 各因子ともに、愛着得点の高低群に有意な群間差は認められていない。

7. ECBI の項目別にみる母親評価と保育士評価の比較検定

母親と保育士が評価した ECBI 共通項目の 28 項目について、母親評価と保育士評価の平均値の差による有意差検定を行った。両者の評価に有意差を認めたのは 20 項目である。20 項目の全てにおいて母親評価の得点が高かった (Table 4, Fig. 2 参照)。

IV. 考 察

本研究は、子どもの問題行動に関連する要因を探究した。母親の子どもへの愛着の重要性は愛着理論で論じられているが、その愛着が子どもに及ぼす要因に関連づけて子どもの問題行動を検証した。

1. 子どもの日常生活について

調査対象児は 5 歳 10 ヶ月～6 歳 10 ヶ月であった。この児の睡眠時間は平均が 9 時間 40 分であり、範囲は 8 時間 30 分～11 時間 30 分であった。年齢に応じた十分な睡眠が取れているといえる¹¹⁾。そして、朝食は 95% の子どもが摂取しており、子どもの心身の成長と一日の活動を考えると望ましい結果である。ただ、朝食の摂取の有無だけではなく、食事内容が問われよう。

2. 問題行動に関する尺度の検討

問題行動を測定する ECBI は、子どもの行動を問う質問紙であるが、子どもの心の内を問う質問紙でもある。また、ECBI 得点の因子分析

Table 4 ECBI の項目別にみる母親評価と保育士評価の比較検定

	母親評価	保育士評価	t 値	p 値
1. 着替えるのにぐずぐすと時間がかかる	3.21	2.21	5.633	***
2. 食事の時間にだらだらするか、だらけてしまう	3.17	2.40	4.371	***
3. 食事の時のお行儀があまりよくない	2.98	2.56	2.297	*
4. 出された食事を食べない	2.31	2.02	2.016	*
5. お手伝いを頼んでも言うことを聞かない	2.5	2.14	2.308	*
6. 寝る支度をなかなかしない	2.63			
7. 決められた時間に寝ようとしない	2.57			
8. 約束を守らない	2.5	2.09	2.993	**
9. 罰を与えるとおどかさずで言うことを聞かない	1.98	1.21	5.776	***
10. 何かするように言われると反抗的な態度をとる	2.36	1.42	7.182	***
11. 決められたことについて両親に文句を言う	2.24			
12. 自分の思い通りにならないと怒り出す	2.81	1.65	5.790	***
13. かんしゃく持ちである	2.29	1.60	3.558	***
14. 生意気である	2.24	1.91	2.373	*
15. ぐちる	2.00	1.56	3.467	***
16. すぐに泣く	2.86	2.12	3.658	***
17. 怒鳴ったり叫んだりする	2.26	1.58	4.012	***
18. 親をぶつ	1.50			
19. 物やおもちゃをこわす	1.69	1.51	1.138	n.s.
20. 物やおもちゃを大切にしない	2.33	2.05	1.570	n.s.
21. 盗みをはたらく	1.05			
22. うそをつく	2.00	1.66	4.735	***
23. 他の子どもたちをからかったり怒らせたりする	1.64	1.89	-1.48	n.s.
24. 同じ年頃の友だちと口げんかをする	2.31	2.18	1.546	n.s.
25. 兄弟と口げんかをする	2.83			
26. 同じ年頃の友だちと取っ組み合いのけんかをする	1.45	1.49	-0.178	n.s.
27. 兄弟げんかのときに暴力を振るう	2.24			
28. たえず注意をひこうとする	2.48	1.49	4.394	***
29. 仕事の邪魔をする	1.86	1.21	5.733	***
30. すぐに取り乱す	1.71	1.26	3.579	***
31. 長い時間集中することができない	2.71	1.96	4.901	***
32. 何事も最後までやり遂げることができない	2.63	1.95	5.013	***
33. 自分一人で楽しむことが難しい	1.98	1.77	1.159	n.s.
34. 一つのことに集中することが難しい	2.29	1.98	1.611	n.s.
35. 活発すぎるか落ち着きがないかのどちらかである	2.05	2.09	-0.416	n.s.
36. おねしょをする	2.05			

***p<.001 **p<.01 *p<.05 n.s.=nonsignificance

により得られた4つの下位尺度は、それぞれに信頼性が得られ子どもの行動を測定する質問紙として妥当である。保育士評価の Cronbach の α 係数においても信頼性を得ている。 α 係数は、第1因子から順に .798、.835、.709、そし

て、.824 である。従って、ECBI の下位尺度の作成により子どもの問題行動を多面的に分析できるといえる。菅野¹²⁾らは、ECBI から4因子を抽出しているが、本研究とは因子内容が異なっている。

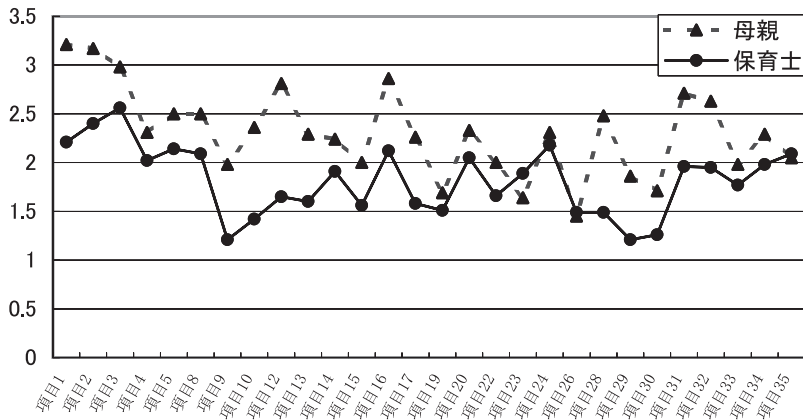


Fig. 2 ECBI の項目別にみる母親評価と保育士評価の比較

3. 子どもの問題行動と母親の子どもへの愛着との関連性について

母親の子どもへの愛着得点を高低群に区分し、ECBI の下位尺度との関連性を分析した結果、母親評価による ECBI の下位尺度である「欲求不満行動」に愛着との関連が認められた。一方、保育士評価による ECBI の下位尺度と母親の愛着得点による高低群には有意な関連性が認められなかった。これは、子どもは母親の愛着を求め、因子「欲求不満行動」に自身の気持ちを出しているといえる。

欲求不満は、直接攻撃を引き起こすわけではないが、個人の中に感情的に喚起された状態、即ち、「怒り」をつくり出すという。この喚起された怒りは、内面における攻撃の準備状態をつくり出すが、それが行動として表出されるのは、攻撃的な意味合いの刺激が環境内に存在するか否かによって左右され、それが存在するときに初めて攻撃行動が生起する¹³⁾。Berkowitz の仮説から考えると、子どもは母親の愛着を求めるが、それが充足されないと、愛着対象となる母親に自分の気持ちを問題行動として表出していると考えられる。

4. 子どもの問題行動における母親評価と保育士評価の相違性について

ECBI の項目別に母親評価と保育士評価によ

る得点の比較を行った。母親と保育士の両方が評価した項目 28 中の 20 項目に有意差を認めた。20 項目すべてにおいて、保育士評価の得点よりも母親評価の得点が高かった。有意差を認めた 20 項目は、第 1 因子である「欲求不満行動」に属する項目が 7 項目で項目の 70.0%、第 2 因子である「集中力の欠如」に属する項目が 3 項目で 60.0%、第 3 因子である「反抗的態度」に属する項目が 4 項目で 66.7%、そして、第 4 因子である「怠惰行動」に属する項目が 6 項目で 85.7% であった。子どもは、家庭では「怠惰行動」が多くみられるといえる。また、母親評価と保育士評価の間に有意差が認められなかった項目には、「物やおもちゃをこわす」、「他の子どもたちをからかったり怒らせたりする」、そして、「同じ年頃の友だちと口げんかをする」などがある。これらは、客観的な事実であり、「着替えるのにぐずぐずと時間がかかる」といった主観が入る項目ではないため、母親評価と保育士評価間に差がないと推測する。評価差は、評価者の立場による子どもを見る目の違いと子どもの行動が家庭と保育園とでは異なることに起因するものと考えられる。

V. おわりに

本研究結果から、子どもの問題行動は母親の子どもへの愛着と関連しており、子どもは自分

の心的状況を問題行動として表出し、母親の愛着を求めているといえる。そして、子どもの問題行動を母親評価と保育士評価の両者から検討した。結果的に、保育士評価による子どもの行動は母親の愛着とは関連がなく、母親評価による子どもの行動が母親の愛着と関連した。

幼児期には、いろいろな問題行動が出現するが、神経系が十分に発達していないことによる症状が多く、成長とともに減少または消失する一過性のもも多い。しかし、対応が求められる子どもの問題行動に対しては、母親と子どもの関係性を問うべきであろう。特に、愛着の問題は、母親と子どもの二者関係だけにその関係性の確立や再確立を求めるのではなく、近隣社会の思いやりが大切である。

Bowlby は、精神的健康は、養育者と「暖かい、親密な、継続的な」関係をどのくらい経験するかによっていると結論した。乳児期から児童期後期までの愛着には連続性がある。安定した乳児は安定した児童になり、不安定な乳児は不安定な児童となる¹⁾。母親と子どもの関係性が個人の行動の主要な決定因となるであろう。

子どもは、子どもの感性で自身と他者の関係性を表象している。その表象化の具体的な表出として問題行動がある。子どもの問題行動は、子どもからの大人へのメッセージでもある。人間関係が拡大されていく幼児期において、人間関係の基本となる母親との関係を安定したものとするために、母親を守る父親(夫)や家族・親戚、保育園や幼稚園の保育者、そして、地域の人々の援助を必要とする。子どもの健やかな発達を守るためには、社会全体がまず母親を守る姿勢と方法を示すことである。

引用文献・参考文献

- 1) ボウルビィ J. 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子・黒田聖一(訳) 1997 母子関係の理論 新版 I 愛着行動 岩崎学術出版 (Bowlby, J. 1969 Attachment and Loss Vol. I; Attachment: Basic

Books)

- 2) Ainsworth, M. D. S. 1969 Object Relation, Dependency, and Attachment: A Theoretical Review of The Infant-Mother Relationship. Child Development, 40, 969-1025.
- 3) ヘネシー・澄子 2006 子を愛せない母 母を拒否する子 学習研究社
- 4) Egeland, B., Pianta, R., & O'Brien, M. A. 1993 Maternal intrusiveness in infancy and child maladaptation in early school years. Developmental and Psychopathology, 5, 359-370.
- 5) Sroufe, L. A., Egeland, B., & Kreutzer, T. 1990 The fate of early experience following developmental change. Child Development, 61, 1363-1373.
- 6) ザメロフ A. J. & エムディ R. N. 編 小此木啓吾(監修)井上果子(訳) 2003 早期関係性障害 岩崎学術出版 (Sameroff, J. A. & Emde, N. R. 1989 Relationship disturbances in early childhood: Basic Books)
- 7) Eyberg, S. 1992 Parent and teacher behavior inventories for the assessment of conduct problem behaviors in children. In L. VandeCreek, S. Knapp, & T. L. Jackson (Eds.), Innovation in clinical practice: A source book (Vol. 11). Sarasota, FL: Professional Resource Press.
- 8) 三輪田明美・手塚一朗 2002 行動チェックリストによる被虐待児の評価: 診療所保育室利用児に実施した2つの評価尺度の結果から (齊藤学編 児童虐待, 126-140, 金剛出版).
- 9) Muller, M. E. 1994 A Questionnaire to Measure Mother-to-Attachment. Journal of Nursing Measurement, 2(2), 129-141.
- 10) 辻野順子・雄山真弓・甲村弘子・乾原 正 2002 母親の胎児及び新生児への愛着の関連性と愛着に及ぼす要因-知識発見法による分析- 母性衛生, 41(2), 326-335.
- 11) 神山 潤 2003 子どもの睡眠-眠りは脳と心の栄養 芽ばえ社
- 12) 菅野 恵・元永拓郎 2006 児童養護施設入所児童における年齢層と問題行動との関連についての研究-複数事例の検討も含めて- 学校メンタルヘルス, 19, 23-32.
- 13) Brkowitz, L. 1989 The frustration-aggression hypothesis: Examination and reformulation. Psychological Bulletin, 106, 59-73.